

講演要旨

## 形而上学的实在論タイプの物理主義を論難する。

井頭 昌彦（一橋大学教授）

物理主義は、自然主義が支配的になっている昨今、もっとも有力な存在論的立場の一つと見なされている（2015年のphilpapersによる調査では56%が物理主義を支持）。このことはもちろん、物理主義に反対する論者がほとんどいないということの意味しているわけではなく、物理主義に対する批判を明示的に展開する文献・論者は多数存在する。他方で、そうした批判の中には、物理主義それ自体に対する理解、あるいはそれを支える擁護論証に対する理解が不十分なことにより、反対論としての説得性を欠いていると判断せざるをえないものも多く含まれている（例えば太田（2018）を参照せよ。太田はM. Gabrielが各所で展開する物理主義批判を検討しその説得性に厳しい評価を下している）。こうした欠陥を持たない有意義な物理主義批判の議論を構築するためには、当然ながら、攻撃対象とする物理主義の立場をきちんと同定し、物理主義に対する擁護論証（とされているもの）のどの部分をどのように批判しているかを明確にする必要がある。

本報告では、存在論的主張のタイプを大きくデフレ主義路線／形而上学的实在論路線の二つに分けた上で、後者の形而上学的实在論路線として展開される物理主義の立場を主題とする。その上でおおむね以下のような形で反駁論証の展開を試みる（表現および論証構造は報告当日までに修正される可能性がある）。

- ① 物理主義は自然主義を前提にせざるをえない。
- ② 自然主義は真理および正当化に関してデフレ主義をデフォルトの立場として要請する。
- ③ 形而上学的实在論としての物理主義を擁護するには、（a）デフレ主義的に許容可能なリソースのみを用いつつ、（b）形而上学的实在論レベルの妥当性を確保する必要がある。
- ④ 物理学の完全性＋顕在化可能性に訴える標準的な物理主義擁護論証はこの条件をクリアできていない。また井頭（2010）で指摘した問題も残る。
- ⑤ 代替論証として想定可能なもののうちもっとも有望なのは、科学的实在論論争に

において実在論擁護側の中核を担う奇跡論法／説明主義論証である。

- ⑥ しかし、この論証は物理主義には適用できない。
- ⑦ したがって、現時点で、形而上学的実在論としての物理主義は説得的な擁護論証を欠いており、支持できない。

報告当日はフロアから広く批判を仰ぎ、この論証のブラッシュアップに努めたい。なお、仮に本報告の論証が成功していたとしてもデフレ主義路線としての物理主義については手つかずのまま残されるが、これについても可能な範囲で議論したい。